

平成 26 年度

**あいち多文化共生作文
コンクール入賞作品集**

【優秀賞（小学生の部）】

豊橋市立岩田小学校	二年	小林 伸輝	
『ぼくの友だち』	．．．．．	．．．．．	一頁

【優秀賞（中学生の部）】

安城市立安城北中学校	一年	村野 夏海	
『シンガポールに学ぶ多文化共生』	．．．．．	．．．．．	二頁

【佳作】

小牧市立篠岡小学校	六年	新垣 善明	
『さまざまな文化と生きる』	．．．．．	．．．．．	四頁

豊田市立竜神中学校	二年	佐藤 龍也	
『差別のない共生社会へ』	．．．．．	．．．．．	五頁

豊橋市立東部中学校	二年	碓 ミ力	
『互いの文化への理解』	．．．．．	．．．．．	七頁

半田市立半田中学校	二年	久村 世奈	
『今の日本の課題』	．．．．．	．．．．．	九頁

半田市立半田中学校	三年	間瀬 茉央	
『祖父の友達』	．．．．．	．．．．．	十一頁

【優秀賞（小学生の部）】

ぼくの友だち

豊橋市立岩田小学校 二年 小林 伸輝

ぼくのかよっている小学校には、ブラジルやフィリピンなどいろいろな国から来た子がたくさんいます。

一年生のときは、クラスの二十七人中、四人が外国人の友だちでした。その中の一人のおはなしをします。

たいいくの時間に「まわれ右」ということばが分からないと言っていたので、ぼくがならっているえいごで、

「ターンライト」

と教えてあげました。せいかつのじゅぎょうの時には、チューリップのうえかたが分からないと言ってこまっていたので、すこし手つだつてあげました。

マラソン大会のスタートの時、ぼくはうしろの子におされてころんでしまいました。そして、だれかに手をふまれてゆびのほねがおれてしまっていました。

その時、いつも手つだつたり教えてあげている外国人の友だちが、

「大じょうぶ？」

と心ばいしてくれながら、ずっといっしょにはしってくれました。

ひざも手もすごくいたくて、ゴールできるかなあと何ども心ばいになりましたが、その子は自分がビリになりそうだったのに、ずっととなりにいていっしょにはしってくれたのです。おかげで、ぼくはぶじにゴールすることができて、とてもうれしかったです。

大会がおわってから、その子に

「ずっといっしょにはしってくれてありがとうね。」

と言ったら、

「ビリじゃなかったから大じょうぶだよ。」

と言ってくれました。すごくやさしいなあと思いました。

二年生になってからは、クラスがべつべつになってしまいましたが、今でもとてもなかよしです。

ぼくが、一人でとしょしつに行つて本をかりようとしていると、その子がいました。一人だったのうれしくなり、二人でいっしょに本をさがしました。その子は、日本語がとても上手になり、今では日本の本も読めます。

「この本おもしろいよ。」

と教えてくれたので、いっしょにその本をかりました。その本は、とてもおもしろかったです。二人でいっしょに本をさがすのは、本とうにたのしいです。

入学しきの時に、外国人の友だちとなかよくなれるかなあと思っていました。すこし手つだつたり教えてあげるだけで、こんなになかよくなれるとはしりませんでした。

これからも、日本人も外国人もかんけいなくなかよけたすけあつて、べんきょうしたりあそんだりしたいと思います。

【優秀賞（中学生の部）】

シンガポールに学ぶ多文化共生

安城市立安城北中学校 一年 村野 夏海

町の看板には、一枚に英語と中国語とマレー語、それにアラビア語も。そして、ホテルの従業員は中国人やインド人にアラブ人が。私がこの夏行ったシンガポールでは、たくさんの国の人が仲良く暮らしている。

言葉も肌の色も文化も宗教も何もかも違う国の人々が、なぜこんなに上手に生活していくことができるのか。この疑問を持ちながら私は町を歩いた。中心部のにぎやかな所では、たくさんの国の人が一緒に仕事をしている。しかし、その周りにはチャイナタウンやインドタウン、アラブタウンなど、国ごとに分かれた町があった。

チャイナタウンでは、仏教の寺があり、あちこちでは、小龍包を作る湯気があがっている。すれ違う人々はみんな中国語だ。

一方インドタウンでは、ヒンドゥー教の寺があり、カレーの臭いが私の食欲をそそる。そして人々の額には、赤や白の印が付いている。

また、今回は行けなかったアラブタウンでは、ガイドブックによるとイスラム教のモスクがそびえ立ち、中東料理の店が並んでいる。私も町で、頭から布をかぶったイスラム教徒の女性をたびたび目にした。

中心部では互いに英語を話し、一緒に仕事をしていた人々が、自分たちの町に帰りそれぞれの文化の中で暮らしている事に私は気付いた。

もう一つ私がシンガポールで驚いた事は町の綺麗さだ。調べてみると、様々な法律があった。ごみや煙草の投げ捨ては罰金。公共の場所でつばをはくことや煙草を吸うことは禁止。細かい事では、公衆トイレで水を流さないことも違反となる。私はなぜこの様に法律が厳しいか疑問に思い、さらに調べた。その理由の一つは、様々な国の人達が一緒に暮らす事にあった。それぞれが自分の文化だけを尊重していると、互いに衝突してしまいトラブルが起きてしまう。だから、このような厳しい法律が必要なのだという。

最近日本では、少子高齢化もあり、たくさんの職場で人手が不足している。このため、特に介護の現場や飲食店などで外国人をよく見るようになった。今後はもっとその数が増える予想されている。また、ニュースで外国人が日本で働きやすいように法律が見直されつつあると知った。一方別のニュースでは、外国人が多く住む町でゴミ出しや騒

音のトラブルが相次いでいるという。日本でも違う文化の人々が上手に暮らす方法を見なければいけない時だ。

なぜ、違う文化の人達が上手に暮らすことが出来るのか。シンガポールで何人かのタクシー運転手に質問してみた。

四十代で白人の男性はしばらく考えた後、笑いながらこう言った。

「色々な国のおいしい料理を毎日食べられるからさ。」

確かにシンガポールには世界中と言ってもいいほどのたくさんの国の料理店があり、いつでも食べられる。私もいくつか食べたが、その国への親しみを感じ、また店員と会話をすることでその国が好きになった。これも多文化共生の一つのヒントなのかもしれない。

一方、三十代で中国人の男性は自信を持って即答した。

「お互いを尊重することだ。戦争をしたり独立を求めていた時代は、お互いを嫌っていたが、今はお互いの事を理解している。」

この男性が言うには、今のシンガポールの学校では中国人、インド人、マレー人などの子供達が机を並べ過去の歴史を詳しく学んでいる。その歴史の結果、様々な文化を持つ人々が仲良く暮らしている今があることを、子供達は教えられているという。

この話には私は大きくうなずいた。今の日本は過去の戦争への見解の違いで中国や韓国などと本当に仲良くなれない状態が続いている。シンガポールはそれを克服しているのだと納得した。

シンガポールはもととたくさんの人がいた訳ではなく、様々な文化を持つ人々が集まって出来た国である。一方日本は、昔から日本人が住み、最近特に様々な文化をもつ外国人が多く移り住むようになってきて、状況は全く違う。しかし私は今回、多文化共生の一つの答えを見つけた。

文化の違う人々が上手に暮らすには、「お互いを認める」ことだ。私は「正しい文化」と「間違った文化」という風に分けること自体がおかしなことであることが分かった。生まれた土地や宗教、それに教育の受け方で人の価値観は違ってくる。当たり前だと思っているルールや習慣を無理矢理押し付けずに相手を尊重し、認め合う必要がある。

【佳作】

さまざまな文化と生きる

小牧市立篠岡小学校 六年 新垣 善明

ここ、小牧は色々な文化が集まる地域である。国内からも、国外からも、様々な所から集まる。それは実にいいことだと思う。

さまざまな人が、さまざまな文化を持っているだろう。その文化によって、衝突することもある。けれど、それは仕方がないだろう。

自分で決めたことではないものに、首はつつこめない。だから、どちらともまちがっているとは言えない。逆にお互いが文化のちがいを認め合い、仲が深まる。これが理想だと自分は思っている。

人格、見た目関係なしに、文化のちがいは自然と出て来るものだ。それは仲間が増えたり減ったりする原因の一つでもある。そのことを自分も家族も経験している。

自分は、日本との文化のちがいでなかなか友達ができなかった。分かってくれる人中にはいたが、自分からなじもうとすることはしなかった。今は日本の文化にもなじむことができたので、前みたいに言われることはないが、なじもうと思った時は苦勞した。

父親の場合、もともといた国で日本のことを勉強したと自分は聞いた。

母親の場合、仕事場の上司に差別をされているのを自分が目撃した。

今、例をあげたように、がんばってなじんでも、相手側が理解できていない等の理由で精神面でかなりつらい思いをしている。そんな人達が減ることが、これからの明るい未来につながると思っている。

そのためには、互いにちがいを認め合う必要性があると思っている。それが今成り立っているからこそ、今の小牧には色々な文化があるのだと思うし、まだ少しずつ増えていくのだと思う。

最終的には、多文化共生のキーワードは、「認め合い」だと自分は思っている。

【佳作】

差別のない共生社会へ

豊田市立竜神中学校 二年 佐藤 龍也

みなさん、「差別」がどのようなことを指しているのか分かりますか。

広辞苑で調べてみると、「差をつけて取り扱うこと。わけへだて。正当な理由なく劣ったものとして扱うこと。」とありました。

なぜ、僕が「差別」という言葉に注目しているのかというと、僕には、そのような体験があったからです。僕は父が日本人、母が台湾人のハーフです。その影響で、僕は家では中国語で会話することが多々ありました。同じアジアの国なので外見で「差別」されることはありませんでしたが、話す言葉の違いで「差別」されることはありました。

僕が小学校の低学年だった頃のある日、親子共同で行う行事がありました。僕と母との会話は中国語で話すことの方が多かったので、そのときもいつも通りに話していました。

しかし、周りの子は異常に反応していました。その中には、僕が話したことを、おもしろおかしく、おどけたように、真似をする人がいました。

初めは何がおかしいのか分かりませんでしたが、その内に、自分の事を言われていると気持ち、恥ずかしくなり、後で冷静に考えてみると、少しいらだちも感じるようになりました。僕はこの出来事がきっかけで人前で中国語を話すことを引き目に感じるのと同時に自分がハーフであることを嫌悪するようになりました。

僕の気持ちを母も察したようで、家に帰ってから母が、

「からかわれたように思うのは仕方がないけど、ここは日本だから日本語で会話するのが当たり前なんだよ。でも、いつかは、中国語も話せるということが誇りに思える日がくると思うよ。」

と、言ってくれました。

しかし、母の話を聞いた僕は、まだ納得できませんでした。しばらくの間、家ではたまに中国語で話すことがあっても、外では、何があっても、中国語で話すことはありませんでした。

それから二・三年がたったある日のことでした。僕がいた小学校に、中国人の転校生がきました。その子は日本語が話せず通訳の先生がいないと学校生活もままならないも

のでした。

僕の思いを変える日は、突然きました。その日は、通訳の先生が学校にいなかったの
で、その子の担任の先生は、僕に通訳のお願いをしました。みんながいるところで話す
のはとまどいましたが、その子のためになるならと思い、引き受けました。

するとどうでしょう。周りの子が「すごい」などと、感嘆の声をもらっていました。
先生からは、ものすごく感謝され、うれしく思いました。そんな時、ふと母の言葉を
思い出し、本当にくるとは思いませんでした。

それから、僕は自分がハーフであることに対し、嫌悪しなくなりました。

近年、日本もグローバル化しています。メディアや様々な場でも沢山の外国人やハ
ーフの方が活躍していることをよく目にします。

また、僕が住む豊田市でも、ブラジルや中国などの人々が豊田へ働きに来ているので
す。

もちろん、その中には家族連れで来ている人もいます。

小・中学校に転入する人が増えているので、その人達が僕のような体験をしないで欲
しいと思っています。

たとえ悪気がなくても、意味もなく真似されたりして、嬉しく思う人はいないはずで
す。

無意識の内に、「差別」をしてしまうことはあるのかもしれませんが、やはり人を傷
つけてしまいます。

だからぼくは、これからの生活の中で、互いの文化や言語などを尊重できるような、
共生社会創りに貢献していきたいです。

【佳作】

互いの文化への理解

豊橋市立東部中学校 二年 碓 ミカ

二〇〇七年三月二十五日に私は日本に来ました。

私は日本で生まれましたが、まだ小さい時にブラジルへ行きました。だから、日本に来たばかりの私は日本語が全くしゃべれず、友達の輪に入れないでいました。

そして、私はすぐ小学校に入学しました。「日本語がわからないんだから、どうせ友達ができないだろう。」と思っていました。そんな時に一人の日本人の子がしゃべりかけてくれました。言葉の壁はありましたが、それでもその子はたくさんのことを教えてくれました。こんなにも理解してくれる人がいると思うと、心の底から嬉しかったです。

このときの気持ちは今でも忘れません。

それから私は周りの協力もあり、半年ほどで日本語で日常会話ができるようになりました。周りの友達や先生方の協力がなければこんなに早く日本語を覚えることはできなかったと思います。

今までわからなかった言葉がわかるようになったり、言語がもう一つしゃべれるようになる楽しさを知ることができました。今では、日本語はだいぶ上達しましたし、スペイン語や英語も少し理解できるようになりました。

これからはもっとたくさん言語をしゃべりたいし、もっとたくさん文化にふれていきたいと思いました。

異文化への理解を深めるには、外国の人と少しでも話したり、その国の食べ物を食べたり、音楽を聴いたりすれば、少しでも交流の輪が広がると思います。交流してみれば、わかると思いますが、自分では常識だと思っていたことが意外とそうでもなかったことに気づけると思います。実際に、私も自分の思ってきたことや学んだことが常識だと思っていました。日本に住み始めてみると、初めてのことばかりでした。「みんな違って、それぞれの文化があるんだなあ」と思えるようになりました。

私の住んでいる地域は外国の人が多く住んでいるので、翻訳されたチラシや看板、外国の店がたくさんあります。日本に住んでいるのに、一つの国だけでかたまっている、日本に住む意味がなくなると思います。「郷に入れば郷に従え」と言いますが、日本の

文化にふれ、それに合わせていくことが大事だと思います。私の家の近くのお店では、日本人でも入りやすいように、商品名を日本語で表示したり、説明が添えてあったりします。私が通っていた小学校では、地域の外国人にインタビューをしたり、ポルトガル語だけで授業をしたり、外国の料理を作ったり、たくさんのことを学びました。それぞれの国の伝統や文化を守りながら、グローバル化をしていくことが大切だと思います。私は、言葉が通じなくて困っている人たちを助けたり、異文化への理解を深めようと思いい、将来は翻訳家か国際関係の仕事に就きたいと考えています。そして今、将来の夢に向かって勉強を頑張っています。

【佳作】

今の日本の課題

半田市立半田中学校 二年 久村 世奈

今の日本は、多文化共生というテーマについて考える土台ができているだろうか。

私が考える多文化共生社会とは、言語や肌の色などの外見からの差別をなくすことだけでなく、自分と違った国民の内面を理解し受け入れる事もできる社会である。

先日、日系ブラジル人が就職の壁にぶつかっているという新聞の記事を読んだ。彼らは日本生まれの日本育ちで何も普通の日本人と変わらないはずなのに、就職活動で面接を受けることすらできないという。理由は、履歴書に書いた名前で国籍が分かっちゃうからだろう。ではなぜ国籍が分かっちゃったら面接を受けることすらできないのだろうか。それだけまだ、グローバル化が叫ばれている今の時代に日本は彼らを受け入れる社会に全くなっていないということになるだろう。また、日本人が無意識にしているままっている差別もある。例えば、本人に直接もしくは他人との会話などで「どうして自分の国に帰らないのかな」という言葉を口に出したとする。それは「お前の国に帰れ」といった意味をただやさしい言葉に変えているだけで同じ事を指していると思う。日本人ではない人々が日本に居てはいけないという規則はない。そういう言葉を発した時点で、もう「他国民は日本にすることがおかしい」という考えを自然にできてしまっていると言える。たとえ意識してそう考えていないとしても、そのような考え方自体が差別になると思う。やはり、この場面から日本人は様々な文化を持つ人々を受け入れる事ができていないと言える。

私は、生まれた時からずっと外国暮らしだった。実際日本には通算二年ほどしか住んだことがない。八年間は隣国で、三年間はポーランドで生活をした。

二〇一〇年、父の仕事の都合で言葉も文化も国民性も何もわからないままポーランドへ移住した。私が住んでいた町はアジア人が数人しかいない小さな町だったので、じろじろと見られることも多かった。ただし、じろじろと見られたのは決して差別とかではなく、ただ珍しさで見られているだけだとポーランドの友人から後で聞かされた。その証拠に、町を歩いているとどこから来たのか、ポーランド語はどこで習ったのか等の質問を知らない人からよく受けた。

私はポーランドで現地の小学校に通いながら習い事もした。初めての日、緊張しながら

ら教室へ行くと、みんなが寄ってきて色々質問された。ただこの時の私はまだ言葉が理解できず、ニコニコと笑顔でいるしかできなかった事が残念だったが、外見の違うアジア人に寄って来てくれた事が何よりも嬉しかったのを今でも覚えている。この後少しずつポーランド語が通じるようになり、色々な話をして過ごした。親友もでき、この友達とは今でも連絡を取っている。三年間楽しく習い事ができたのは、この私を受け入れてくれた教室の仲間と先生が居たからだ。

私がポーランドで過ごした三年間は、もちろん決して楽しい事ばかりではなかったが、目の色も肌の色も考え方も生活習慣も全く違う人々と共に過ごすという事はどういう事なのか、そしてその違いを理解し受け入れるとはどういう事なのかを体験を通じて考えることができた事は貴重な財産だと思う。

日本へ来てちょうど一年が過ぎた。国際社会の中で先進国と言われている日本で私が感じた事は、自分と違う外見や行動や考えを持つ者を受け入れただけでなく、理解しようとしてもしないととても残念で寂しい国という事だ。

まず、この地球上には様々な宗教、言語、肌の色、考え方があることを知ってほしい。そしてその違いを理解し受け入れてほしい。

海外の人が日本へ来る理由はそれぞれだが、共通する点はこの日本で日本人と共に生きるという事だ。彼らの考え方や行動を理解しながら日本人の考え方や習慣を教えてあげる。理解とはこうして進んでいくものだと思うし、理解できれば受け入れる事もできていくはずだ。

この先日本は人口が減っていくと言われている。人口が減るという事は働く人が減るという事でもある。もう日本人だけにこだわっている場合ではない事は誰にでも分かるだろう。そして何よりも、能力よりも外見や日本人とは違う内面を持っているという理由で日本社会から排除されるという事があってはならない。全ての人々が差別する事もされる事もなく、日本社会に受け入れられる事を心から願い、また、日本社会が本当の多文化共生の社会へ向かって進歩していくことを期待したい。

【佳作】

祖父の友達

半田市立半田中学校 三年 間瀬 茉央

私の祖父に、外国人の友人が出来た。年の差は、たぶん五十歳位。どこの国の人かというと、おそらくブラジル人だろうとのこと。耳の遠い祖父と、片言の日本語を話す外国人、そんな二人が、いつ何処で出会ったかという、それは祖父の畑だった。

半年程前、祖父の家の近所に、外国人夫婦が引っ越してきた。私の家の近所では、さほど珍しくもない、外国人のいる風景。でも、何故か祖父の家の辺りには、今まで誰も住んでいなかったようだ。

ある日、祖父が畑仕事をしていると、その人が畑の中まで入って来て、祖父に話しかけてきたそう。祖父の畑は、周りが低い塀で囲まれていて、畑の中に行くには、ぐるっと回って入り口を探さなければならない。多分その人は、囲いの外から何度か祖父に声をかけたにちがいない。でもその声は、耳の遠い祖父には届かなかったのだろう。

その人は、片言の日本語で、野菜の事を色々聞いてきたそう。苗の植え方や、今何を植えたらいいか、水は、いつどれくらいやったらいいかなど、本当に熱心に聞いていたという。日本人同士なら、何の問題もなく話が進んだだろうが、何せ、耳の遠い祖父と日本語が話せない外国人の会話。いったいどれ位の時間がかかったことだろう。二人が首をかしげながら、身振り手振りで会話をしている風景を想像してみたら、思わず「ぶっ」とふきだしてしまった。

次の日もその次の日も、野菜作りの先生の所に、その外国人は勉強しにきたそう。祖父も、まんざらでもない様子で、丁寧に野菜の事をひとつひとつ教えていた。時々、自分の畑で育った野菜を、その人に持たせてあげたりもした。

そんなある日、その人が奥さんと一緒に畑にやって来た。祖父からもらった野菜で、何とかという料理を作って、祖父に持ってきてくれたのだ。奥さんは、片言の日本語で、はずかしそうに、

「い・つ・も・、あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・す」

と言って、やさしい笑顔でお礼を言った。

その日の晩ご飯は、祖父と一緒にその、何とかという料理を食べたそう。八十年生きてきて、初めて食べる味だったけど、とてもおいしかったと、うれしそうに話してく

れた。

それから、その夫婦は時々畑にやってきて、その時期の野菜の作り方を教わっていくそうだ。時には、自分の庭で出来た野菜を持ってきてくれるらしい。祖父の畑には、同じものが、もつと沢山出来ているのに、その人はうれしそうに、自分の作った野菜を持って来てくれるのだそうだ。その野菜で、今度は祖母が、日本の味をごちそうしたりして、祖父母と、その外国人の友達夫婦とは、今も楽しいご近所付き合いをしている。人と人とは、たとえ言葉が通じなくても、笑顔ひとつで、こんなにも簡単に仲良くなれるのに、国と国になると、どうしてこんなにややこしくて、面倒くさい事になってしまうんだろう。それぞれの国は、歴史も違えば、ルールも違う。そして、そのそれぞれの国は周りに囲いを作って、一生懸命、自分の国を守ろうと必死だ。でも、その囲いの中に居るのは、私達、ただの人達なんだ。祖父とその友達のように、囲いの中に話しかける勇氣と、それを受け入れる心の広さを持ちたいものだ。

ちなみに、二人は未だに、お互いの名前を知らない。

名前くらい聞けばと笑っちゃったけど、二人の間には、名前なんかも必要ないのかもしない。